

その日起きたこと。

柏崎市立高柳中学校一年 大野 かすみ

いつもの楽しい夕飯。

やーん

私は無意識のうちに祖母と妹と一緒に机の下へ隠れた。みんな何が起きたのか分からない。かっ。一瞬で明るくなった。食卓が変わった。車へ避難しよう。

父の一言でみんな車に移動した。父は消防小屋へ行ってしまった。兄は旅行で帰って来る

のは八時の予定だった。つまり車の中には、母、祖母、妹、私の四人である。また車がゆれる。

「兄ちゃん大丈夫かな？」

妹が言った。母は兄に携帯で電話しようとした。だが、たくさんの人が使っているせい。つなげられなかった。ゆしたってからもう一度かけてみる。だがつながらない。母はあきらめた。数分すると母の電話が鳴った。兄からの電話である。

「今どこへ何時ごろ帰れる？」  
「もうすぐで家につくと思う。」

母の会話を車内でしっかりと聞いていた。

入時半。兄が帰ってきた。と一緒に父も帰

ってきた。ゆいがおさまっていた。私と兄と

母で家を見に行くことにした。家に入ると、

食器類はほとんどの割れいていた。とりあえず、

毛布とお菓子をもち、車へもどった。

十時になった。みんな眠くなってきた。

「家の中で寝るか？」

父がぽつりと言った。みんな車の中で寝いな

いので賛成した。父と兄が家の一番安全な所

にストイブと毛布で寝る所を作ってくれた。

ストイブでお温をわかし、カップライメンを

食べた。みんな毛布に入った。

「額が落ちているかな？」

「電気落ちてこないかな？」

「電気つかないかな？」

そんな恐怖の中私達は目を閉じた。